私の一家は、昭和十二年頃（私が二才頃）朝鮮に渡り満州の方へ行った様です。父は建設業を営んでいましたので、色々な工事をして、ハイラルという所で暮らしていました。昭和二十年八月九日、早朝6時ソビエトから爆撃され、その二時間後、何もかも捨て、家を後にしました。（私三年生九才、妹四才、父母と四人）日本の軍用列車（最後の軍の家族用）に乗り、何々部隊ですか！！と問いつめられ、トイレに逃げ込み小さくなっていました。汽車の横腹をバンバン銃で撃ちこまれ、窓から上に頭を出さない様に、やっとの思いでチチハルに着き、そこで終戦のラジオを聞いたのです。8月15日（9才）（天皇の忍びがたきを忍び）
石炭を運ぶ屋根のない汽車に乗ったり、野宿したり、ハルピンではソ連兵に銃を胸につきつけられ、父が捕虜としてシベリアにつれて行かれました。母は父の事を若くないから、つれて行かないでとたのみましたが、日本は100才まで引張ったから何を云うか！と云うありさまです。母は一ヶ月位銃をつきつけられた時の胸の痛みが残っていたそうです。日本がロシア、ソ連、中国、韓国の人達を苦しめて来た分、日本人がうらまれて、苦しめられた人が多くいました。ある時、たき木を山につみ、馬車が通って行くんだと思って見ていたら、何人と人の死がいが山とつまれていたのです。その年の冬、亡くなった人達が冷凍になってつまれていたのです。その時のありさまは、今も目に焼きついています。満州の冬は零下40度、突然バーンすごい音がして、何んだろうと思えば、一家で自決する人があちこちでありました。日本は四方からせめられて、負けたんだから日の丸がひし形になって、天皇も日本の国もどうなっているかわからない。日本に帰っても国があるかどうかわからない。色々なデマがとび希望を失い皆自決したのです。
その後、大連までのがれて来、何ヶ月も引揚船を待ちました。食べ物はすいとん、お茶葉をかじり、ひまわりの種をかじり、お米のごはんは全く食べられませんでした。人あつかいされない状態で引揚船に。当時、しらみをわかしている人が全員ですので、芋を洗う様に人がいっぱいの風呂へ入れられDDTをふりまかれ、トラックにぎゅうぎゅう立つ様に乗せられ大連の埠頭から高砂丸という大きな病院船に乗って日本へ。佐世保に着いた時は、栄養失調でした。二十二年一月でした。出身地名古屋にもどり着きました。昭和22年、名古屋でさえも空襲でまともな校舎がなく、子供達は皆、みかん箱（当時ざらざらした木の箱でした）をかついでかよい、机のかわりにして勉強をしていました。教室が全員になく、午前と午後にわけ授業が行われていた様です。私は一年八ヶ月学校に行けなかったので、五年生に入学すべき所、三年生に編入させられ、いくらか背丈のちがいが、私にとって、つらい思い出です。結局、二年後、五年の三学期を六年の三学期にとび中学に入学して大変な思いをしました。
最後に、戦争は本当にしてはならないと考える。人が大勢でないといけないと思います。社会の動きは皆んなの力で色々な方向へ行きます。その当時も命がけで反対す

る人は沢山ありました。でも、その勢力が弱く国民もあまり深く考えないうち、軍部に負け、その様な時代に引きずりこまれて行ったのです。今は主権在民、その当時は婦人には参政権がなかったのです。ましてや現在の戦争は、こんななまっちょろい武器ではないのです。人類破滅です。どうか何が正しいか一人一人がしっかり自分の意見がもてる人に育ってほしいと願わずにはいられません。

今井　美恵子